

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2017年4月8日
文責：JUN

「めあて」と「ふりかえり」

最近、強調されていることがあります。それは、授業の始まりには「めあて」をはっきり示し、授業の終わりには「ふりかえり」を書かせるということです。学力向上策の一つとして教委あたりから出てきたもののようです。

しかし、多くの教師がこのことに対して懐疑的です。意味のないことだとは思わないけれど、それほど大切なことだろうか、それで学力向上につながるのだろうかという思いがあるからです。それは、「めあて」も「ふりかえり」も、これまでも実施していることだし、その経験からするとそれほど意味のあることだという印象がないからではないでしょうか。

しかしここで考えてみなければなりません、「めあて」とは何か、「ふりかえり」とはどういうものなのかと。そのうえで、どう考えてもたいして意味はないということであればやらなければよいでしょう。けれども、これまでのやり方がよくないのであって、それ自体は学びを深める意味あるものだというのであれば、やり方を工夫して実践しなければなりません。

1 「めあて」は、なぜ大切なのか

漢字で書くと、「めあて」は「目当て」と書きます。辞書を引くと、「目標とするもの、心の中で目指しているもの、目的」と書かれています。つまり「めあて」は、目を当てるようにして、つまり照準を定め目指す、その目標となるものまたは事柄を指し示しているということになります。

ここで大切なのは、授業の場合、目を当てるのはだれかということです。何かを目指して行動するのはだれなのかということです。それは当然、子どもでなければなりません。しかし、これまで「めあて」を設定したときのことを思い返してください。そのとき、それは子どもの目指すものになっていたでしょうか。その授業のあいだ子どもたちは「めあて」を目指して考え続けていたでしょうか。どの子どもも、設定した「めあて」に照準を定めていたでしょうか。

そう問われて、「はい、そうなっていました」と胸を張って答えられる教師がどれだけいるでしょうか。つまり、「めあて」が本当には「目当て」になっていなかったのです。そういう感覚があるので、今回の「めあて」重視に対して懐疑的になっているのでしょう。

子どもが、目指すものをはっきり認識するのはよいに決まっています。教師に教えられる勉強になってしまう危険性が高い「一斉授業」型は、何を狙っているのかが分からないままだけに教えられるまま習熟と暗記を強いられています。それで当座の結果が出たとしても、それで学力と言えるかどうか疑問だし、何よりも学ぶ魅力が希薄で、学ぶ意欲も出ないでしょう。それは、これからの時代で期

待される学びではない、だから、新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」が重視されることになったのです。

「めあて」はその「主体的」ということとつながります。何を指すのかがはっきりしているから主体的になれるのですから、「主体的・対話的で深い学び」にとって「めあて」は必要なものと言えるでしょう。

2 どういう「めあて」ならよいか

子どもの学びの深まりにとって「めあて」は不必要なものではありません。それははっきりしています。しかし、これまで行われてきた授業で、明らかに不必要だったという事例は枚挙にいとまがありません。それはなぜでしょう。

一つには、「めあて」が子どもの目指すものになっていないことがあげられます。授業の始まりに、「今日のめあては…」と言って黒板に書く教師は多いです。子どもにそれをノートに書くようにしている教師も、さらに声を合わせて読ませる授業もかなりあります。ところが、そのほとんどの授業において、その「めあて」が子どもの中で強く意識されることがありません。むしろ、ものの何分もたたないうちに意識の外になってしまっているのです。

その理由は、そもそも「めあて」にした事柄そのものにそれだけの魅力がないということがあります。たとえば、「登場人物の気持ちを考えて読もう」などと言ったものが示されることがありますが、それで子どもたちが意欲的になれるでしょうか。なんとしてもそれを考えたいと思うでしょうか。文言が具体的でなく抽象的なのです。そういう授業を見ると、この先生は子どもの側に立って考えていないなと思います。学ぶ子どもの気持ちになったらそういう「めあて」は出さないからです。

もう一つ感じるのは、授業はこういうふうにするものだ、学習指導案はこのように作成するものだというパターンの通り実施しているのではないかということです。つまり、子どもたちの学びの目標としてどれだけ魅力的・具体的なものにしようかという考え方をしないで、半ば機械的・形式的に設定しているのです。それでは子どもの目指すものにはなりません。こうして授業冒頭の「めあて」設定は、単なる形式的なセレモニーになってしまうのです。だから、子どもは淡々と言われるままに行い、またたく間に忘れてしまうのです。

二つ目に考えなければいけないのは、どんな授業であっても、目指すものが「めあて」として設定できるだろうか、ということです。子どもがどうしても知りたい、考えたいと思うこと、夢中になって考えるきっかけになること、それはいつでも「めあて」のような文言で表現できるだろうかということです。

教師たちが抱いている「めあて」はどんなイメージかと言うと、やはり、具体的ではない、やや広い意味合いを有するものではないでしょうか。例えば、「定滑車3個に動滑車3個を組み合わせるとものを上げる力はどれだけになるだろう」などという具体的ものは「課題」であり、その場合の「めあて」は「滑車の仕組みを考えよう」だったりします。

この場合、子どもが意欲を燃やすのは「めあて」でしょうか「課題」でしょうか。それは間違いなく「課題」です。子どもを夢中にさせるのは「課題」です。だったら、「めあて」なしでいきなり「課題」を提示し、その「課題」に取り組む授業にしたっていいのではないのでしょうか。「めあて」を提

示することが大事なのではなく、子どもの学びの意欲が高まり学びが深まることが大切なのですから、「めあて」提示にこだわる必要はありません。

しかし、「めあて」がずっと子どもの学びへの意欲として、目指すものとして保ち続けられることもあります。私が授業をしていたころ、ほぼ一年間「文字の根っこ」という表題で「字源」を題材にした総合学習に取り組んでいました。そのとき子どもたちには「文字の根っこを見つけ出そう」という「めあて」があり、その「めあて」に強い思い入れを抱いていました。

要するに、「めあて」を提示するのであれば、子どもが意欲を燃やす内容で、明確に意識できるような提示をして、常にそれを具現化する取り組みを展開することです。機械的・形式的にならないことです。もっとも大切なことは子どもの身になって考えることです。

そして、あえて「めあて」は設定しないで、具体的な「課題」から学びに入っていくことであってもいいのです。それは教委の指示通りにしないということではなく、指示に込められている意図を考え、学びの深まりを図るため、そのほうが適切だと判断して実行することだからです。

どちらにしても、子どもをただ連れ回すような教師が教える授業のままで「めあて」をいくら工夫してもだめなのです。そういう授業から脱却し、子どもが「めあて」や「課題」に向かって夢中で取り組む授業にしていく、それがもっとも大切なのではないのでしょうか。

3 「ふりかえり」は、なぜ大切なのか

「ふりかえり」とは、体をねじって後ろを見るという動作から派生して、過去の行動や考えを思い返し考え直すという意味になります。辞典を引くと、よく似た言葉に「顧みる」と「省みる」があります。「顧みる」は、過去の事柄やしてきたことの有様を考えることで、「省みる」は、立ち返って悔いるところがないか考えてみるという意味です。つまり、授業で行う「ふりかえり」には、「顧みる」という意味合いも「省みる」という意味合いも含まれるでしょう。

子どもたちが取り組んできた自らの学びを振り返るという行為は大変意味のある行為です。それは、自分のしてきたことを思い起こすということが学び直しになったり、学びの修正になったり、新しい気づきを生み出したり、次への課題につながったりするからです。

けれども、教師たちはそのどこに懐疑的なののでしょうか。これも「めあて」と同じで、機械的・形式的に実施してきたこれまでの自分たちの実践にあります。授業の残り時間でパターンとして書かせてきたからです。それは子どもにとって書かされるだけの面白くないものです。だから、ささっと早く書き上げてしまう子どもを何人もつくってしまったのでしょうか。それに、そうして書いたものが、それぞれの子どもにとって意味のあるものとして活用されてきたのでしょうか。書いてよかったと思うような対応がなされてきたのでしょうか。いえ、そもそも授業が、振り返りたくなるような魅力あるものだったのでしょうか。教師たちが「ふりかえり」を書かせたところで？と懐疑的に思うのは、そこに、形だけで書かせたイメージがあるからでしょう。

4 どういう「ふりかえり」ならよいのか

書くということはどちらかというと面倒なことです。おそらく書くことが好きだという子どもは数

えるほどしかないでしょう。けれども、書くことほど学びにとって大切なものはありません。一字一字文字を記し、言葉を連ねていくことで、どれだけ自らの考えに気づいたり、自分の置かれている状況に気づいたり、これからどうすればよいかを考えたりできるか計り知れないほどです。面倒なことだけれど意味のあること、それが書くことです。面倒がる子どもの気持ちをよく理解しながら、書いてよかったと思えるような書かせ方をする、教師は、そのためにどうすればよいかしっかり考えていなければいけません。

2分ほどの時間で、いやいや書くような「ふりかえり」ならやらないほうがよいという考えもよくわかります。けれども、だから書かせないでよいという考え方にならないほうがいいです。大切なのは、どのように書かせたら意味のある「ふりかえり」になるかと考えることです。

短い時間で書かせると、子どもは「おもしろかった」とか「よくわかりました」とか「むずかしかった」とかいう言葉だけを並べます。本当にそういう気持ちになったという場合もあれば、そう書いておけばよいという程度で書く場合もあるでしょう。そのどちらも書くだけの意味は薄いと言えます。

わたしに教室があったころ、「友だちの名前、友だちが出した考えが出てくる文章にしましょう。そのとき、友だちの考えを自分はどう聴いたか、どう感じたか、そして、自分はどんなことを話したか、そこから何を学んだか、よく思い出しながら書きましょう」というようなことを子どもに言って、一人ひとりの子どもの目からとらえた「学び合う学び」を文章にするようにしていました。そうすることで、子どもたちは「学び直し」ができると思ったからです。「学び直し」をすれば、その授業での学びが確かになるだけでなく、新たな気づきが生まれることもあります。書くという行為は、それを可能にしてくれます。

それには、授業の終わりがけの短い時間では書けない、そう思って、学校で時間が取れないときは家庭学習にするのが私の常でした。ただし、子どもに書かせるだけではだめなことは明らかです。子どもに書かせたら、必ず、すべての子どもの文章を丁寧に、親身になって教師が読まなければいけません。そして、子どもに言葉を返さなければいけません。つまり、書き言葉による「対話」をすることです。この「対話」で子どもは意欲をわかせます。教師が書き入れる言葉がどんなもので、子どもが次に書く意欲も内容も変わってきます。

「ふりかえり」は重要です。学びは、授業時間に生み出すものですが、授業時間後の「ふりかえり」記述時にも生まれます。「自分は、ふりかえったりはしません。前だけ向いて生きていきます」という人生観を語る人がいます。それは、過ぎ去ったことをうじうじ考える暇があったら、これからどうするかを考える」ということなのでその前向きさは大切です。けれども、そう言っている人も全く振り返っていないかと言うと、そうではないでしょう。むしろ、しっかり過去を見つめ、そこを乗り越えようという意思を持っているからこれから先に思いを馳せることができるのでしょう。

自分がどう考えて、何をしてきたか、それを見つめないで先は見えません。教師もそうです。自分の授業の事実を見つめないで教師としての成長はありません。

子どもにとっても「ふりかえり」は大切です。要は、教師がどう振り返るように仕向けるか、そして子どもの振り返りにどう応えるかでしょう。

「めあて」をどう設定するか、「ふりかえり」をどう書かせるかは大切だけれど、もっと大切なことは、「めあて」の中身に違わない授業をすることだし、学びを深める「ふりかえり」が書けるような中身のある授業をすることである。結局は、教師次第である。